

年頭にあたって

新年おめでとうございます。新しい年を迎え、今年はどのような年にしようかと、いろいろと計画しておられることと思う。

この4月をもって平成の時代は30年余の歴史に幕を降ろすことになるが、『皮膚病診療』は昭和54年の発刊で、その後の昭和から平成の時代を40年ほど駆け抜けてきている。これまでの多くの方々のご支援、ご叱咤、ご指導を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

本誌は皮膚病という疾患を中心にした臨床雑誌であり、長年にわたってテーマを決めて特集号を続けていると、病気については語り尽くされてしまいそうである。しかし、最近の風疹の流行や梅毒患者の増加などを見ていると、繰り返し知識を呼び戻すことが求められていると感じる。疾患自体が時代とともに変化が見られることがあり、接触皮膚炎のように、新たな原因物質の出現、また、新しい薬剤の開発が進むことによって新たな薬疹の発生をみることも経験される。生活環境の変化による皮膚への影響を踏まえて、そのときそのときに起こりうる皮膚疾患を的確に、また、時期を遅らせることなく、広く情報を流すことは、教科書には書かれていないことだが、大変重要なことになる。現在は、学問の進歩による疾患の病態生理の解明とそこからの新たな治療法の開発など、多くの情報が発せられている。乾癬あるいは座瘡を例にとっても、病態生理に基づいた新たな治療薬、治療法の開発といった進歩には目ざましいものがある。臨床医としてはその情報をいち早く得なければならない。その手段にはさまざまな方法があるが、雑誌を読むことも1つの手段である。近年では活字離れが指摘されてきており、印刷物という雑誌の使命、存在意義などを考えながら今後も雑誌の発行を進めて行かなければならない。そのためには読み応えのある魅力的な内容にすれば、読者の満足度をあげることができよう。編集委員の努力が重要になっている。

雑誌には症例報告が掲載されており、日常の診療の中で経験できない疾患を知ることができる。そこで、執筆者にお願いしたいことは、症例をみていない読者にわかるように症状を詳細に記載して欲しいということであり、類似した症状を呈することのある鑑別疾患をあげ、それらの鑑別点を述べていただきたいということである。比較的若い医師が学会発表をする機会が多いと思うが、発表した症例はできるかぎり論文にまとめるように努めて欲しい。その際には指導者にも、論文のチェックを厳しく行っていただきたい。そうすることにより、後に引用されるような症例報告になり、学問的にも重要性が増すことにつながる。

平成の次はどのような元号になるのか興味深いが、本誌もこれまでとは異なる感覚のもとに変化してゆかねばならないと考えており、新たな道に挑戦したい。引き続きご支援のほどお願いいたします。